

令和元年度の東北地区スモン検診結果

千田 圭二 (国立病院機構岩手病院脳神経内科)

高田 博仁 (国立病院機構青森病院脳神経内科)

青木 正志 (東北大学神経内科)

豊島 至 (国立病院機構あきた病院脳神経内科)

鈴木 義広 (日本海総合病院神経内科)

松田 希 (福島県立医大脳神経内科)

研究要旨

令和元年度の東北地区スモン患者の現状を調査した。検診受診者は41(男8、女33;来所23、訪問18)人であり、平均年齢は79.6歳であった。平成29年度に比し来所検診が大きく減少し、訪問検診が同数維持に留まったため、受診率は52.6%と8.7ポイント低下した。東北地区スモン検診受診者群の動向として、高齢化、身体症状の重症化、介護の高度化、長期入院・入所の比率増などがあらためて示めされた。検診率の向上のために、検診希望者を漏れなく検診することと、非受診者に検診受診を促すことが重要である。

A. 研究目的

令和元年度(2019年度)の東北地区スモン患者の病歴、身体状況、医療、日常生活、介護について調査し、その現状と動向を把握する。

B. 研究方法

東北6県の班員とその協力者が県ごとにスモン患者に連絡を取り、'19年9~10月に「スモン現状調査個人票」を用いて、来所検診または訪問検診の形式で、身体状況、医療、日常生活、介護・福祉の状況について調査した。各班員から送付された個人票とスモン医療システム委員会から送付された集計資料とをもとに、東北地区スモン患者の現状を解析した。なお、'18年度の集計には電話調査が含まれたが、'19年度には含まれなかったため、主に'17年度の検診結果¹⁾(電話調査を含まない)と比較しながら、'08年度以降の12年間の動向を検討した。

C. 研究結果

1. 受診者と検診形態

令和元年度の東北地区スモン検診受診者は41(男8、女33;青森5、岩手12、宮城7、秋田3、山形9、福島5)人であった。検診形態は来所検診が23人、訪問検診が18(自宅7、病院・施設11)人であった。秋田では7人に電話聴取り調査が行われたが、以下の解析には来所・訪問検診受診者のみを対象とした。受診率は52.6%(=41人/平成31年4月の手当受給者78人;電話聴取りを含めると61.5%)、訪問検診率は43.9%(訪問検診数/総受診数)であった。年齢は57~96(平均79.6)歳であり、85歳以上が39.0%を占めた。

'17年度と比較すると、手当受給者は15人減少した。訪問検診は同数を維持したが、来所検診が16人減少し、受診率は8.7ポイント減少した。訪問検診率は12.3ポイント増加した(図1)。12年間で手当受給者が50.3%に、受診者数は60.3%に減少した。平均年齢が4.2歳上昇し、85歳以上の比率は約3倍に増大した。

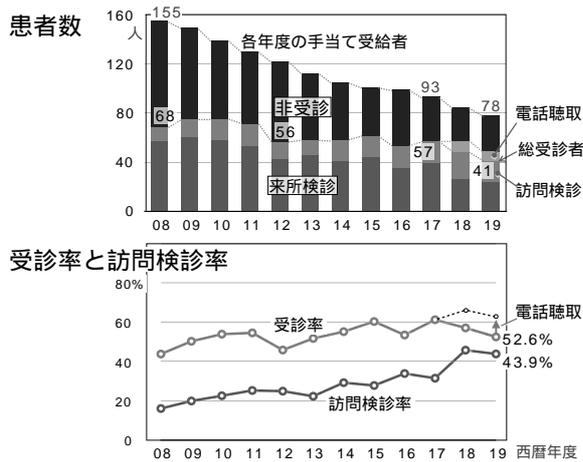


図1 患者数、受診率と訪問検診率

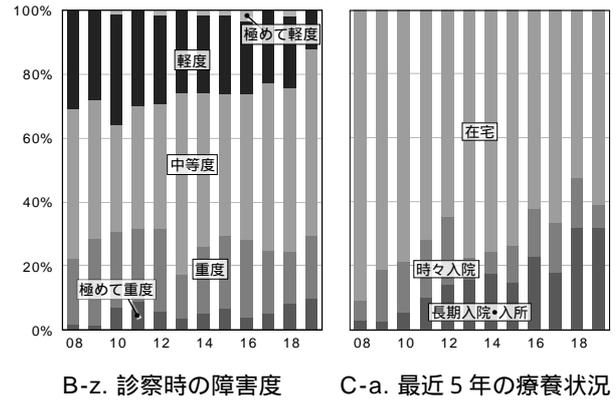


図3 診察時の障害度 (B-z) と最近5年の療養状況 (C-a)

の比率減・中等症の比率増の傾向がみられ、重症の比率増は鈍化したように見える。視力、異常知覚および胃腸症状では一定の傾向が見られなかった(図2)。併発症では'17年度と比べると心疾患と脊椎疾患で比率が大きく増大した。診察時の障害度では、減少傾向にあった軽度以下の比率がさらに減少し、療養状況では「長期入院または入所」の比率が大きく増大した(図3)。

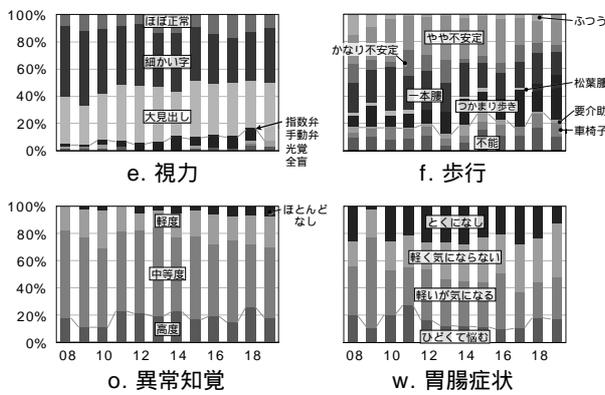


図2 スモンの主要4症状 (B)

2. 身体状況と医療

スモン主要症状の重症比率は、視力「全盲～指数弁」が7.5%、歩行「不能～車椅子自走」が20%、異常知覚「高度」が17.9%、胃腸症状「ひどく悩んでいる」が17.5%であった。身体的併発症は97.6%が有しており、10%以上に現在影響のある併発症は白内障(19.5%)、心疾患(17.1%)、その他の消化器(14.6%)、脊椎疾患(22.0%)、四肢関節疾患(17.1%)の5つ。精神症候は87.8%が有し、現在影響のあるものは記憶力の低下が31.7%、認知症が14.6%であった。診察時の障害度は、極めて重度4人、重度8人、中等度24人、軽度5人、極めて軽度0人。障害要因はスモン5人、スモン+併発症33人、併発症3人、スモン+加齢0人であった。長期入院または入所の割合は31.7%であった。治療は95.1%が受けており、内訳はスモンの治療14.6%、合併症の治療85.4%であった。

スモン主要症状は12年間において、歩行では軽症

3. 日常生活動作および介護

一日の生活は、一日中寝床3人、寝具上で身を起こす1人、居間・病室で座る7人、家や施設内を移動5人、時々外出16人、ほぼ毎日外出8人であり、Barthelインデックスは0~100(平均72.4)であった。転倒は最近1年間に23人(61.0%)が経験し、骨折が3人に4件(手首1、大腿骨近位部1、脊椎2)生じた。一人暮らしは18人(43.9%)であった。

介護状況は、毎日介護16人、必要時介護12人、介護者がいない2人、介護不要11人であった。介護保険を申請していた28人の認定結果は、自立が0人、要支援1が4人、要支援2が5人、要介護1が5人、要介護2が3人、要介護3が5人、要介護4が4人、要介護5が1人であり、認定結果が妥当との評価が53.6%を占めた。将来の介護について不安を抱く人は20人、50%であった。不安に思う内容は、介護者の疲労や健康状態(25%)、介護者の高齢化(20%)・介護者が身近にいない(20%)の順に多かった。介護度が増した場合の見通しは多い順に、現在入所中の施設27.5%、介護と介護サービスを合わせて自宅25.0%、

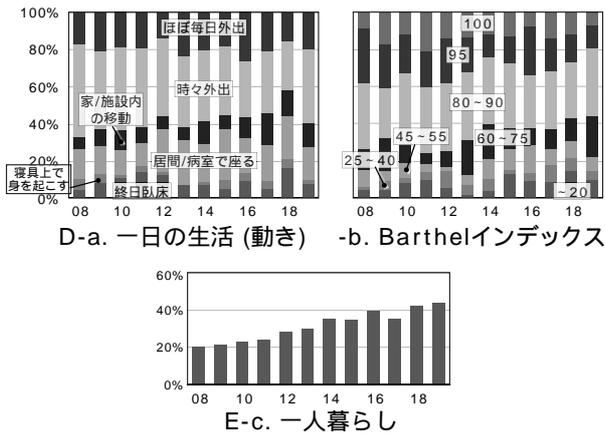


図4 一日の生活 (D-a)、Barthel インデックス (D-b) と一人暮らし (E-c)

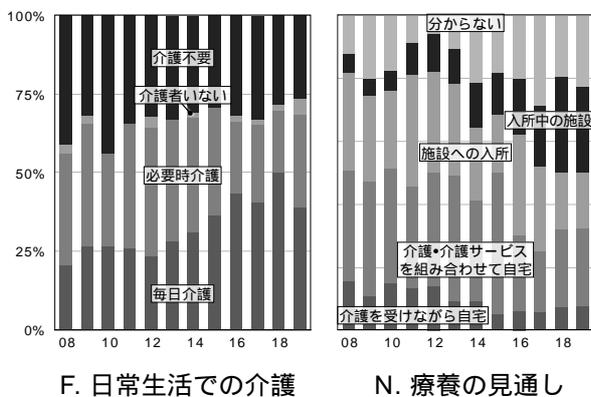


図5 日常生活での介護 (F) と療養の見通し (N)

施設入所 17.5%、介護を受けながら自宅 7.5%であった。

12年間で、「一日の生活」の各カテゴリーの比率に大きな変化はみられないが、Barthel インデックスでは95以上の漸減と40以下の漸増がみられ、「一人暮らし」の比率は漸増した (図4)。日常生活での介護で「毎日介護」の比率の増大傾向、介護度が増した場合の見通しで施設への依存 (入所中の施設+施設入所) の比率の増大傾向 (図5)、および将来の介護に不安を抱く割合の減少傾向 (図6) のいずれもが鈍化してきたようにみえる。

D. 考察

東北地区の2019年度のスモン検診受診率は52.6%と低率であった。最も受診率の高かった'17年度¹⁾と本年度を比較すると、非受診者 (順に36人、37人) と訪問検診 (18人ずつ) はそれぞれほぼ同数であり、

M. 介護への不安

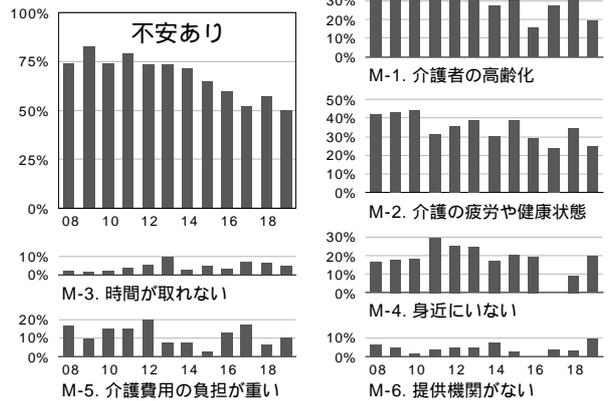


図6 介護への不安 (M)

手当受給者の減少 (15人) がそのまま来所検診の減少 (16人) に対応している。すなわち、受診率低下の主因は来所検診の大きな減少であって、減少分を訪問検診で補うことができず、非受診者には手付かずのままという構図である。

非受診者群は、主として検診を希望しながら受診できなかった群と検診を希望しない群とで構成されている²⁾。今後受診率を向上させ全例把握に近づけるには、検診希望者を漏れなく検診し、あわせて非受診者に検診受診を促すことが重要である。受診率向上の方策としては検診の確実な連絡、訪問検診の推進、検診の付加価値向上、行政との連携などが挙げられる²⁾。また、検診以外の方法 (電話や訪問による聴取り調査、郵送アンケート調査など)^{3,4)} も非受診者の把握に有用である。今年度のデータに電話聴取り調査を加えると受診率は60%以上となる。検診以外の方法は検診の補完のみならず、将来的に新規検診参加へ導くことも期待できる⁵⁾。

12年間の動向としては、高齢化、身体障害や介護度 (歩行、診察時の障害度、日常生活動作、日常生活での介護など) における軽症群の減少および中等症群ないし重症群の増加、「長期入院または入所」の比率増大、介護度が増した場合の見通しで施設への依存の増大、将来の介護に不安を抱く割合の減少などがあげられる。これらは昨年度までの報告と同様に、高齢化と併発症とによってスモン患者群の障害度や介護度が増大してきたことを反映すると考えられる。

ただし、障害や介護度の重症化、施設への依存の増

大、および将来の介護に不安を抱く割合の減少については、以前指摘したように¹⁾、その傾向が鈍化してきた可能性が窺える。障害や介護度の重症化の鈍化には、受診者群が患者群全体の傾向を表しているか疑問の余地があるものの、施設依存や介護の不安における傾向の鈍化は介護・福祉サービスの普及による効果かもしれない。

なお、併発症については、心疾患と脊椎疾患で比率が大きく増大した。脊椎疾患の増加には加齢による可能性が考えられるが、心疾患の急な増大の意義は不明である。

受診者群の今年度集計データは地区患者全体の約半数を表すに過ぎないため、患者群全体の現状や動向の把握には正確性の点で限界がある。上記のスモン検診群の特徴が患者群全体の現状と動向を反映しているのか、今後の推移をみることで明らかにできるだろう。現状と動向をより正確に把握するためにも、さらに受診率を向上させ、全例把握に近づける努力が必要である。

E. 結論

'19年度の東北地区スモン検診では検診率が減少し、その主因は来所検診の減少であった。東北地区のスモン検診受診者群の動向として、高齢化、障害の重症化・介護の高度化、長期入院・入所の比率増などがあらためて示された。検診率の向上には検診希望者を漏れなく検診することと、非受診者に検診受診を促すことが重要である。

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

I. 文献

- 1) 千田圭二ほか：平成 29 年度の東北地区スモン検診結果．スモンに関する調査研究班：平成 29 年度総括・分担研究報告書，54-57，2018
- 2) 千田圭二ほか：東北地区スモン検診の検診率向上への再考．スモンに関する調査研究班：平成 27 年度総括・分担研究報告書，123-125，2016
- 3) 小西哲郎ほか：京都府在住スモン患者 51 名全員の療養状況の把握の試み．スモンに関する調査研究班：平成 28 年度総括・分担研究報告書，142-145，2017
- 4) 豊島至，和田千鶴：秋田県のスモン登録患者の推移．スモンに関する調査研究班：平成 30 年度総括・分担研究報告書，83-84，2019
- 5) 千田圭二ほか：平成 30 年度の東北地区スモン検診結果．スモンに関する調査研究班：平成 30 年度総括・分担研究報告書，56-59，2019